

第 1 回 気候変動に適応した治水対策検討小委員会 議事概要

1. 日 時 平成 19 年 8 月 27 日 (月) 15:00 ~ 17:00
2. 場 所 合同庁舎 3 号館 4 階特別会議室
3. 出席委員 (敬称略)
福岡委員長、池淵、磯部、木本、中北、藤田、藤吉、三村、虫明
4. 議事 (概要)
 - (1) 小委員会の進め方について
 - (2) 適応策の検討に係る基本的な考え方について
基本的な認識、主要な論点について
適応策の基本的方向について
 - (3) その他
5. 主な発言内容
 - (1) 小委員会の進め方について
 - ・ 12 月の中間とりまとめ時には、パブリックコメントを行うのか。
 - (2) 適応策の検討に係る基本的な考え方について
基本的な認識、主要な論点について
 - ・ モンスーンのパターンが変わるなど、季節が変わったらどうなるのかという評価は大事だ。
 - ・ 日本の河川整備率について、他国と整合させて表現すべき。
 - ・ 気候変動の予測についてどのような温暖化シナリオを用いているのか。
 - ・ 将来の降水量をどの程度の幅に設定するかということは、今後の研究が必要であり半年程度の委員会での設定は無理である。しかし、数字が揃うまで待ってられないという状況であることも事実である。
 - ・ 長期的な観点からは社会の変化も重要である。気候変動の対応で国土の将来像をどう考えるのか、という観点も必要である。
 - ・ 海面上昇のように徐々に上がってくるものに対しては、順応的にやっていくというのが対応しやすいが、突発的な非常に大きな災害に対して、どうするか考えておく必要がある。
 - ・ 豪雨後の土中の水分含有量が非常に高くなったところに、地震が発生し地滑りが起こる、といった複合的な災害やその影響という観点も日本では非常に重要。
 - ・ 気候変動は相当長期間にわたって続くと予想されているが、どこまで考えるのか。数十年続くことに対してだけ考えるのではなく、数世紀にわたって続いていくものも度外視しないほうがよいのではないか。
 - ・ 数世紀先を確実に予測するのは難しいが、どういう原理で、どのような未来がシナリオとして描けるのか、整理し念頭に置いて議論したほうがよい。

- ・ 何百年かかって水位の上昇がどんどん続くという話を前提にすると難しい。自分の国の数十年先を中心に考えて、そういう背景があるということに留意しておくべき。
- ・ 順応的なプロセスのあり方について、時間スケールを整理してほしい。
- ・ 名古屋市の土地利用について教えてほしい。
- ・ 東日本、西日本、太平洋側、日本海側、北海道というような議論が、日本モデルでできるか教えてほしい。
- ・ まだまだモデルの予測に限界があるため、日本の各地域に分けたデータはかなり精度が落ちざるを得ない。
- ・ ちゃんとした精度でなくても、定性的に降雨の傾向や地域性を把握できるもので良いのではないか。また、国交省としても研究費をつけることが大切である。

適応策の基本的方向について

- ・ 土砂災害は、崩壊のように家屋に直接的な被害を及ぼすものと、河床変動によって氾濫しやすくなる間接的な問題があるため、その辺を仕分けをして気候変動の影響評価や対策を考える必要がある。
- ・ 海面上昇のように期待値が上がるとか分数が上がることに新たに対応しないといけない部分と、現状中で行われているオペレーションで対応する部分の2つに分かれる。
- ・ リアルタイムでの気象の予測精度が上がることでカバーできる分野や事象を整理できれば良い。
- ・ 海岸浸食対策には、土砂の供給量を増やしていくことしかないのでは。そういう意味では、総合土砂管理は現在の海岸侵食問題の解決策となるし、長期的にも問題解決につながる。
- ・ 世界への貢献として、発展途上国にグローバルモデルなどによる気候予測の結果をうまく当てはめるといふことと、その国でどのような影響が起こるのかということを見積もることを助けることが非常に有効である。
- ・ 外力を決めたとしても、対策に100年も200年もかかるのでは意味がないので、短期的にどれだけ効率的にやるか、不十分な部分はどこで補っていくのか、長期的にはどのようにするのか、といった視点が必要。
- ・ 今回の小委員会は、現在行われている治水施策の課題・問題点を直していくチャンスである。
- ・ 河川整備計画では外力の議論はしないものの、外力の変化によって厳しい状態が起こることを頭に置きながら議論を進めているが、河川整備計画の中にも当面やるべきこととして反映するようなものを整理する必要がある。
- ・ ダムの上流と下流で分けて考えてはどうか。ダムでの情報がわかれば、ダムより下流はしっかりとした計画や議論ができる。
- ・ 地球温暖化は50年、100年の範囲で雨の10%、20%とかの増加は大体合っている。
- ・ 過去の統計とも組み合わせれば、おおよその外力の設定は研究を詰めれば可能ではないか。